

平塚柔道物語 7 4

山下泰裕氏と上水監督の師弟

平塚柔道協会 会長 奥山晴治

東海大上水監督の愛読書の中で最も自分に影響を与えた本は何かと聞いてみた。答えは宮城谷昌光という作家の「楽毅」という本である。「人が見事に生きることはむずかしいものだ」という一言から始まる。中国の乱世時代を一筋の生き方で貫く名宰相の物語である。第1巻から第4巻までであった。私は、上水氏の人物を知るために、全巻を読んでみたのである。主人公はあらゆる逆境と悪条件の中でも、必ず勝つための施策を考えて実践した魅力的な人物であり、人間性もすばらしかった。この本を読みながら、主人公と上水氏の人物がダブル感じがした。考えてみると、これらの本が土台となり、上水監督の手法や生き方になっていったのではあるまいか。話をして、感心するのは、いろいろな課題が自分なりに、実によく整理されていることが、上水監督の魅力であり、強さであった。このような人物を推薦したのは誰なのか、それは、師匠の山下泰裕氏であると言われている。名選手ではなかったが、上水氏を東海大の監督として起用した。私は以前に聞いた山下氏の講演での話を思い出した。山下さんが東海大の監督の時、B君という柔道部員がいた。山下監督は「あれは、やる気のないダメな男だ」と心で決めつけていた。B君は入学当初は、日本一を目指して柔道部に入って来たものの、同じ志を持った強豪部員のもとで、レギュラーにもなれずにいつの間にか、やる意欲も弱くなっていったのである。山下さんは、こうした彼の一面を見て、ダメな男と決めつけていたという。しかし、ある時、外部の人から、彼が大変に優しく、かつ勇気ある行動をとれる人物であると聞く。山下さんは驚いた。悩んでいるB君をわかってあげようともせず、一度として温かい言葉をかけたことがなかった自分を反省したのである。さらに「私が監督として、B君らの気持ちがわからなかったのは何故なのか。振り返って見ると、私は今まで名選手でエリート街道を突っ走って来たからかも知れない。それよりも自分の重大な誤りは、名選手に続いて名監督になろうとし

た自分の生き方が大きな間違いであったのだ」と講演で力説した。聞いていたのは、私はもちろん、会場の中学校の教師と生徒達であった。「世界の柔道家として高い評価を受けている山下さんが、そこまで言い切るとは・・・」私は思った。そして、その言葉は、山下氏の謙虚な人柄と自己への厳しい生き方を物語るものであり、私は山下氏のふところの深さを思いつつ、非常に感銘を受けたのであった。私はその感動を山下氏に手紙でお伝えしたところ、即刻お礼の電話が自宅に届いた。このことは今でも記憶している。

名選手イコール名監督という図式を根本から考え直し、そのような経過も踏まえて、苦労人の上水氏を東海大の監督に推薦したのではあるまいか。山下氏はさすがである。山下さんは先が見える人である。その時、聞いた山下さんの講演は「人生の金メダル」というタイトルであった。「柔道が強ければ、金メダルはとれる。だが、その後の人生こそが大切なのであると・・・」その後、金メダル保持者の1人が不祥事を起こした事件があった。まさに、それを予測していたかのような提言であった。その山下氏が、最近、上水氏を呼んで「おい上水、お前は俺を越したな!」と言ったという。この一言に、その人物の大きさと心の温かさを感じる。山下氏は上水氏の師匠である。師匠が弟子のことを心から思わなければ、このような一言は出てこないものである。師匠と弟子の信頼関係は、もちろんのこと、現代社会で失われている師弟という姿が、まさにここにあるのではないか。これこそ、私が求めている師弟の姿であり、現実に見た思いがして嬉しかった。



山下さんの講演会での筆者